国語　京都大学　文系学部（前期）１／３

一

問一

人は体験を語る際に、真実の姿に直面することに耐え切れず自己を美化しようとするが、そうした自己の欺瞞的なありようをもなんとか隠し通そうとするということ。

（解答欄３行）

問二

目を背けたい弱点を含め、自己の真実の姿を直視する人は、それによって得た、いかなる人にも通底する人間の苦悩を弁え、他者の弱点を痛烈に指摘できるということ。

（解答欄３行）

問三

劇を見る人が、自分のあわれさに向き合うことなく他者の運命をあわれみ酔うのと同様に、自己の真実の姿に無自覚であるからこそ、弱点を含めた人間の真実を描いた小説を面白がって書いたり読んだりできるということ。

（解答欄４行）

問四

体験の美化や隠蔽を指摘し顕わにする小説が、人の真実の姿をさらせばさらすほど、人生とは不幸なものでしかないという決定論に陥ることに、虚しさを感じたから。

（解答欄３行）

問五

人の世がもつ豊かな意味を解き明かしたいという思いに駆られた人々にとって、人の口から語られる体験談や告白は、真実を捉えようとする小説とは別に、人生の機微から生まれた生の言葉の積み重ねであり、人の世の秘密をときほぐすひとつの手がかりとなりうるものだから。

（解答欄５行）

©河合塾　2020年

二

問一

井伏は、自分が傾倒していた太宰と遠慮なく口がきけるだけでなく、師匠として太宰が多大な薫陶を受け感化されてきた人物だったこともあって、井伏その人に身近に接すると太宰のことがまざまざと偲ばれてくるから。

（解答欄４行）

問二

静かで気持ちのこもった井伏の話ぶりは、聞く者を井伏の穏やかな雰囲気に自ずと同化させていく豊かさがあるから。

（解答欄２行）

問三

豊かな文学性につらなる井伏の話の妙味や、気持ちをくつろがせるその人となりを、味気ない自分の言葉では伝達できないのではないかと危惧しているということ。

（解答欄３行）

問四

五十半ばをすぎた男盛りの立派な風貌を誇るどころか、それを持てあましているかのように卑下する井伏だが、それが意識的な韜晦（とうかい）だと感じさせるほど、身のこなしや作品には衰えぬ若々しさと洗練が感じられるということ。

（解答欄４行）

問五

身の回りのことに拘泥せず簡素に暮らしている井伏が、子供の頃に遊んだ古びた玩具に気持ちを和ませているさまに接すると、井伏の素朴な安らぎに自分も引きこまれ、幼時の記憶があれこれと豊かに想起されるということ。

（解答欄４行）

©河合塾　2020年

三

問一

親しく話をしたら、悲しさが慰められることもあるかもしれない。言葉を交す値打ちがないと思わないでほしい。

（解答欄２行）

問二

恋人を亡くし悲しくて、ただ声をあげて泣くばかりなので、宮が訪ねて来ても何も話すことができず、どうしようもないからと宮の来訪をやんわりと断る気持ち。

（解答欄３行）

問三

宮の突然の訪問を不都合に感じるものの、居留守を使うことはできないし、昼に返信したことでもあり、いるのに会わないで、そのまま帰すのも心ない仕打ちだと思って、話ぐらいはしようと思った。

（解答欄４行）

問四

（３）

世間の人が美しいと言うから自分もそう感じるのだろうか、宮は並一通りのご容姿ではなく若々しく優美だ。

（解答欄２行）

（４）

私は古風で家の奥にいることが多い身であるため、月に明るく照らされた戸口には座り慣れていないから、とてもきまりが悪い気がするので、

（解答欄３行）

©河合塾　2020年